

MIT Technology Review

Published by KADOKAWA / ASCII

MITテクノロジーレビュー[日本版] ワンテーマ・マガジン × WEBメディア 広告企画のご案内

6月



9月



2022年4月

MITテクノロジーレビュー[日本版]

角川アスキー総合研究所

KADOKAWA

MITテクノロジーレビュー[日本版] マガジン 刊行スケジュール



巻数	テーマ／タイトル	発売予定日	記事広告締切日	純広告締切日
Vol.7	世界を変える10大テクノロジー 2022年版	2022年6月15日	4月22日	5月12日
Vol.8	脱炭素イノベーション	2022年9月15日	7月22日	8月10日

タイトル・表紙デザインは仮です。発売日／スケジュールは変更になる場合があります。

MITTR恒例の人気企画。 今もっとも注目すべき10大技術を解説。

20年以上続く毎年恒例の人気企画「世界を変える10大テクノロジー」特集号。AI／ロボット工学からエネルギー、遺伝子工学分野まで、MITテクノロジーレビューがいまもっとも注目する最先端のテクノロジーを10個厳選し、キープレイヤーやキー研究者への取材を通じて深く解説します。

新規事業の企画や投資分野の選定に役立つ、世界のイノベーション動向に関する情報を俯瞰して得られる1冊です。

おもな内容(予定)

「2022年版 世界を変える10大テクノロジー」

- ①新型コロナ飲み薬
- ②実用的な核融合炉
- ③パスワードの終わり
- ④タンパク質構造のAI予測
- ⑤プルーフ・オブ・ステーキ(Proof of Steak)
- ⑥送電網向け「長持ち」蓄電池
- ⑦AIのための合成データ
- ⑧マラリアワクチン
- ⑨炭素除去工場
- ⑩新型コロナ変異株追跡

本特集に関連する企業

AI/ロボット工学関連企業、ICT関連企業、エネルギー関連企業、製薬・バイオテクノロジー関連企業、投資ファンド等



* 上記表紙写真は 2021年版のものとなります。

- 2022年6月15日 発売予定／6,000部
- A4判128ページ／オールカラー
- 予価：本体2,200円＋税

「CO2ゼロ」実現へ向けた グリーン・イノベーション動向をレポート。

日本政府も打ち出した2050年のカーボン・ニュートラルへ向け、いま世界中で開発競争が激化している脱炭素テクノロジーを総特集。自然由来の再生可能エネルギーの最新技術から、CCS(二酸化炭素の回収、貯留)やバッテリー技術の注目の動きを紹介します。また、米国を中心とする政策動向や排出権取引が抱える問題点など、解決すべき課題についてもレポート。

おもな内容(予定)

- 消えた幻想「シェールガス革命」とは何だったのか？
- CO2直接回収が描くバラ色の未来、過剰な期待が危険な理由
- EVシフトで資源争奪戦、鉱床発見にAI投入
- 太陽光パネルのゴミ問題、「リサイクル」スタートアップに脚光
- 「鉱山のゴミ」でCO2回収、アスベストは地球を救うか
- 太陽光発電、コスト激減でクリーンエネの主演に まだ安くなる？

ほか

本特集に関連する企業

エネルギー関連企業(再エネ、水素等)、バッテリー関連企業、バイオテクノロジー関連企業、投資ファンド、SDGs推進企業



* 制作中につき、実際の表紙とは異なります。

- **2022年9月15日** 発売予定 / 6,000部
- A4判128ページ / オールカラー
- 予価: 本体2,200円 + 税

全世界のビジネスリーダーが愛読。147カ国・8言語、 400イベントを展開するグローバルメディアです。

MITテクノロジーレビューは、米国マサチューセッツ工科大学（MIT）によって1899年に創設された世界で最も歴史と権威があるテクノロジー誌です。147ヶ国・8言語で出版・配信。世界最高峰の理工系大学とグローバルメディアが保有する、世界中のイノベーターや研究者とのネットワークを活かした記事展開やイベント開催が特徴です。

◎ なのためのメディアか

テクノロジーによって「社会や産業がどう変革していくか」を 未来予測するメディア

◎ 主な読者層

自社やクライアントの事業成長にコミットする 経営・マネジメント層 が中心読者

◎ 紹介する企業やスポンサー

世界の変革を主導するイノベティブな リーディングカンパニー



MIT Technology Review

News

遺伝子系図探偵が予測する
犯罪捜査の未来

John Olson in 2019
million genetic pro
- 700,000
ti

日本版 媒体概要
【名称】MITテクノロジーレビュー
【URL】<https://www.technologyreview.jp/>
【形態】会員登録・有料購読制のオンラインメディア
【料金プラン】年額14,800円 / 月額1,480円
【創刊日】2016年10月1日

ページビュー

500,000 PV / Month

ユニークユーザー

300,000 UU / Month

無料会員数

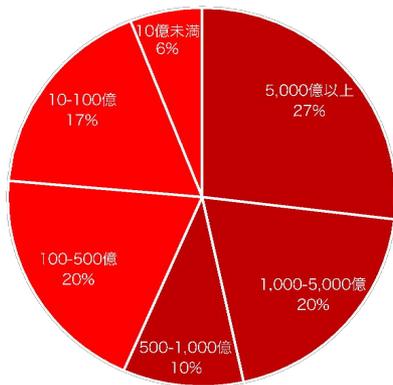
約80,000人

<https://www.technologyreview.jp/>

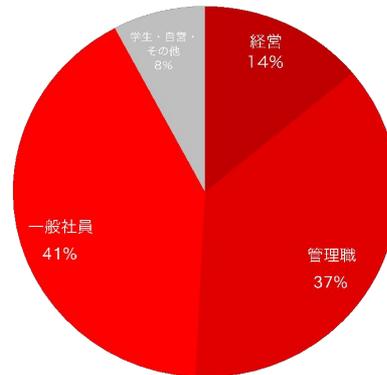
企業のマネジメント層が**自社の事業領域の将来予測**や、**新規事業のための情報源**としてMITテクノロジーレビューを購読しています。

ITや製造業の技術者・研究開発職や、経営企画やマーケティングに関わる方を中心に金融や教育関連など、幅広い業種・職種をカバーしています。

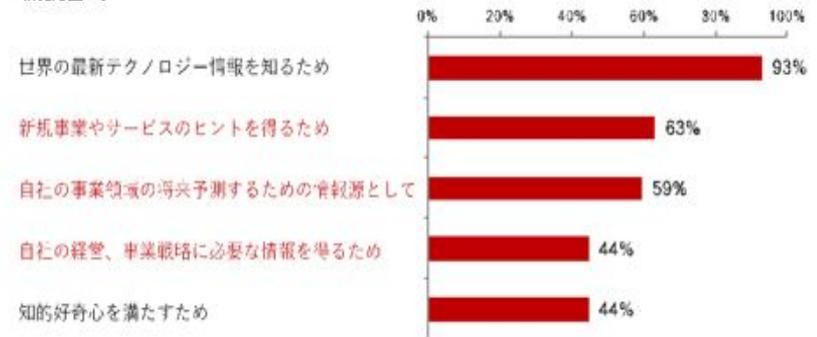
■ 会社の売上規模



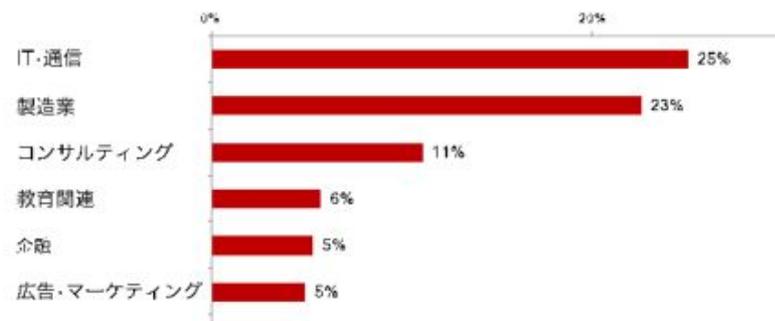
■ 役職



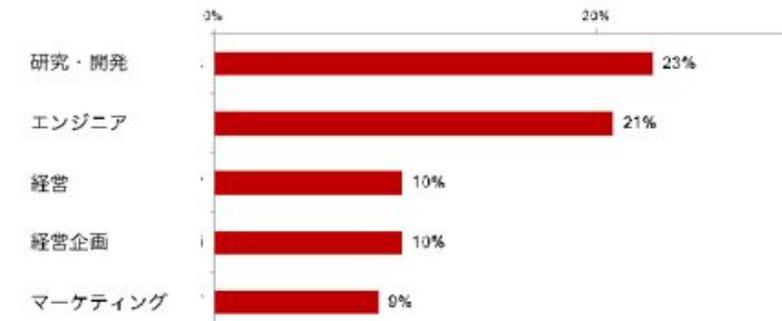
■ 購読目的



■ 業種



■ 職種



2016年10月の創刊以来、サブスクリプション・モデルのWebメディアとして運営してきたMITテクノロジーレビュー[日本版]。この間、米国版の翻訳記事を中心に、毎月100本以上／合計4,000本以上のオンライン・コンテンツを8万人以上の会員の皆様にお届けしてきました。

MITテクノロジーレビュー[日本版]ワンテーマ・ムックはその膨大な記事の中から、特に日本のビジネス・パーソンにお読みいただきたい価値ある記事を厳選。テクノロジーによって解決すべき社会課題、注目すべきテクノロジーなど、ワンテーマごとに再編集した「マガジン」として定期的に刊行していきます。

マガジンでは、米国版の翻訳記事に加えて、国内の研究者や起業家への取材、寄稿など、日本版オリジナルコンテンツを制作・収録し、国内のテクノロジーやビジネス動向についてもフォローしていきます。

MITテクノロジーレビュー[日本版]は、少子高齢化など社会課題先進国・日本がいま取り組むべき課題の解決、新規事業創造に欠かせない想像力を養うための知識を提供します。



- A4判128ページ／オールカラー
- 予価：本体2,200円＋税
- 流通形態：ムック(雑誌扱い)
- 刊行点数：年間4点刊行予定
- 発行：角川アスキー総合研究所
- 発売：KADOKAWA

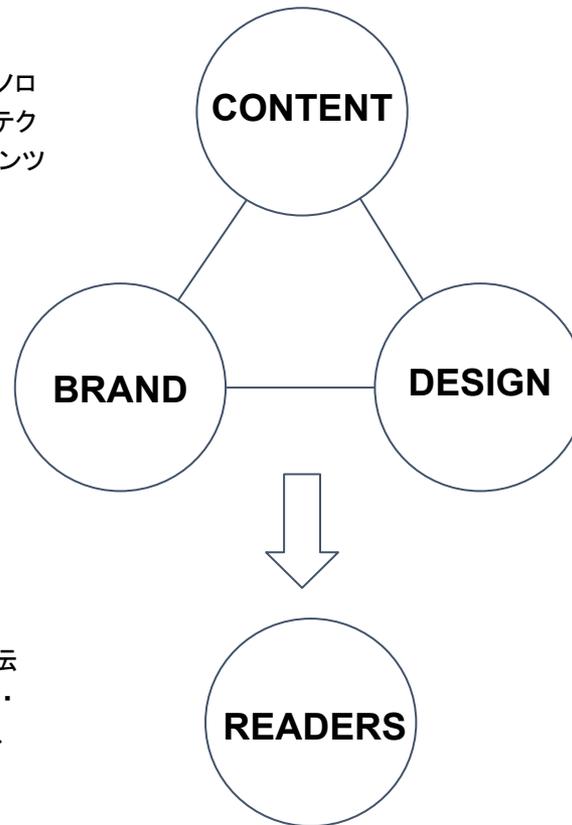
* 主要電子書店にて電子版も発売

①MITTRならではの 良質なコンテンツ

先端分野の研究者、受賞歴のある一流のテクノロジー・ジャーナリスト／作家などが執筆したMITテクノロジーレビューの信頼性の高い良質なコンテンツを中心に構成します。

②MITTRならではの ブランド

世界最高峰の理工系大学であるMITによって1899年に創刊された、世界でもっとも歴史と伝統あるテクノロジー・メディアです。ワンテーマ・ムックは、MITTRのブランドを前面に打ち出した、日本では初の刊行物となります。



③MITTRならではの 美しいデザイン

MITTRのブランドにふさわしい、簡潔かつ読みやすく、美しくデザインされた誌面で、紙の出版物ならではの読書体験を提供します。

④MITTRならではの 質の高い読者

日本版(Web)は特に、大企業の研究開発部門や経営企画・新規事業部門に所属する会員に高く支持されています。

ワンテーマ・ムックでも、テクノロジー感度が高く、企業の意思決定に関わる読者層を想定しています。



MITTRが誇る グローバルレポート を厳選収録



MITTR日本版 編集部が執筆 国内最新レポート

MITテクノロジーレビュー(米国版)記事の中から、グローバルの動向が得られる記事を選定・収録。キーパーソンへのインタビュー、技術解説、研究動向、政策動向などで構成。

<記事例>

- 量子コンピューターはなぜ必要なのか？
- 独占インタビュー: 初の「量子超越性」実証でグーグルは何を目指す？
- スパコンと量子コンピューターは結局どちらが速いのか？

国内の動向をフォローするオリジナル書き下ろしの記事を収録。MITテクノロジーレビュー日本版編集部が独自に企画、取材・執筆。

<記事例>

- 日本の研究者たち
国内の大学研究者／企業の最先端の取り組みを紹介
- 日本の動向を読み解く
有識者による国内のテクノロジー動向／政策動向の解説

MITテクノロジーレビュー日本版編集部がエグゼクティブ・インタビューやブランドの取り組みを紹介します。

<記事例>

- エグゼクティブ・インタビュー
- イノベーションの舞台裏
- 対談企画



MITTR特別編集 ブランド・ストーリー (広告企画)

■ブランド・ストーリー 記事広告(2P記事広告+WEB転載)

(参考事例)

エグゼクティブ インタビュー記事



INNOVATION STORY
**屈指のAI最適化集団が挑む
 「インフラ」のイノベーション**

タンカーの配船計画時間を1/60に

AI技術のビジネス活用は、従来のパターン認識からより高度な最適化問題の解決へと向かいつつあると語るのは、AI開発・コンサルティングを手がける株式会社グリッドの菅我部亮氏だ。同社が取り組む石油輸送の配船計画プロジェクトから、インフラ分野のイノベーションの可能性を探る。

文：黒澤 亮
 写真：黒澤亮

AIテクノロジーの進化によって、人々の生活や産業を支える社会インフラの分野にもAIの活用が広がっている。出光興産とグリッドが共同で進める「深層強化学習を活用した配船計画最適化の実

証実験」プロジェクトもそうした取り組みの一つだ。AIのビジネス活用といえば、データAI化された画像の解析や自然言語処理が一般的だ。しかし、本プロジェクトでは現実の世界に即した問題を解決するために、より複雑な制約条件下における「最適化問題」を、深層学習と強化学習を組み合わせた「深層強化学習」を用いて解くことで未来予測と業務効率化を行っているのが特徴だ。

「私たちはもともと深層学習のフレームワークを開発することから事業を開始し、パターン認識を用いた予測や分析についても多く取り組んできました。こうした機械学習の技術をベースに開発させて「最適化問題」を解くというのが最近の課題内容で、日本国内はもちろんA世界でも珍しい取り組みだと自負しています」

そう語るのは、グリッド代表取締役の菅我部亮氏。では、石油輸送における配船計画の最適化とは、具体的にどのようなものか。

日本では東欧、東南アジアから輸入した原油をいったん船積みし、貯蔵し、利用目的に合わせて特許された石油製品を船積みすることで世界中の沿岸の沿岸にある石油貯蔵タンカー(国内向けタンカー)で輸送するという流れが基本となっている。出光興産の場合は、全船に4万トン前後の原油と20万トンの沿岸貯蔵タンカーを持ち、船積の割合やそれぞれの輸送量、出光子会社や輸送するに利用する石油製品の種類(バース、合計80カ所)の利用可否や、その船の天候・波高といった情報を基に実現可能な配船計画を立案している。

この配船計画の作成には、経験豊かな専門スタッフが手作業で膨大なパラメータを入力する作業が必要であり、多くの時間をかけていただけ

く天候や波高の予測をどのように計画の見直しを簡単に行われていたという。グリッドでは、これらの多様な制約条件下において最適化となる条件を満たしつつ、日単位に近づけるために、実行結果を繰り返す学習アルゴリズムを開発。船積計画全体のシミュレーターを仮想空間上に配置することで、AIが最適な計画とそのシミュレーション実行結果をAI側に戻して、AIがどのような状況下でも最適な配船計画を出せるように学習を繰り返した。

「人間が持つ知識をデジタル世界に落とし込め、すなわちデジタル化し、深層強化学習といくつかの最適化手法を組み合わせたことで独自のAI配船計画を構築することに成功しました」

もちろん、当初は経験則にそぐわない計画をAIが出力することもあったが、その原因を追求していくと、これまで表現していなかった新たな制約条件が明らかになることもあったという。これらを学習したシミュレーションの結果として、従来の配船計画と比べて20%の輸送効率の向上をもたらされただけでなく、配船計画の作成時間を60分の1にまで短縮できたという。

「何より、これまで“未知”とされてきたものを数式化できたということが、本プロジェクトの大きな成果と考えます。2021年の本運用に向けて、より大規模に船や貯蔵タンカーの数も増強して行っているところです」

現実世界のデジタル化で最適化を推進

そして、この深層強化学習を用いた最適化技術はサブプライム・マネジメントなど多くの分野にも応用可能だという。

「私たちが「インフラ」イノベーションという理念を掲げて、電力や通信、石油や天然ガスなどインフラ分野に特化した最適化ソリューションを展開してきました。製薬・セメントの改善でもツールでは大きな効果が得られるが、この仕事の醍醐味です。出光興産とのプロジェクトもその哲学の延長線上にあって、生産計画やサプライチェーンの最適化問題に挑戦できることができます。ほかにも、化学物の生産など材料配合の分野も応用可能です。AI、とりわけ深層強化学習の発展には大きな可能性があり、人の知識や都市全体をデジタル化して最適化していく取り組みを進めているところです」

グリッドでは今後の展開として、AIに加えて量子コンピュータを使った最適化アルゴリズムの開発にも取り組んでいく。2019年9月には、量子コンピュータの商用化に向けた総論「IBM Q Network」にもいち早く加入した。「量子コンピュータはまだ手探りの段階です。しかし、いざいざの段階で強制的に発展する時期を迎えるはずなので、まず基礎研究に取り組む。学術研究機関とも連携して年間に6〜7本の論文を発表しています」

技術を現実の世界で、ほかに類を見ない高次元なシミュレーション技術で「デジタルツイン」化し、社会・エネルギーインフラの最適化問題に挑むグリッドの取り組みは、AIの新しい可能性を広げ、未来の私たちの暮らしや都市全体をスマートに作り変えていくに欠かせない。■



株式会社グリッド
<https://gridproduct.jp/>



MIT Technology Review 071

WEB転載

ブランド・パートナーシップ 広告メニュー事例

■ブランド・ストーリー 特集記事広告(4P記事広告+WEB転載+電子マガジン配布 ※2次利用)

(参考事例)

エグゼクティブ インタビュー記事

出版デジタル革新による持続可能なコンテンツ・ビジネスの ところざわサクラタウン 発信される KADOKAWAのSDGs

2020年11月6日、KADOKAWAの統合施設「ところざわサクラタウン」がオープンした。ミュージアムや子どもを巻き込んだ体験型施設であると同時に、KADOKAWAが推進する各種デジタル事業の拠点となる。同社が目指す持続可能なコンテンツ・ビジネスの姿と、ところざわサクラタウンを中心としたSDGsの取り組みを紹介する。

実現へ から



出版業界、業界団体は出版の場、紙の本が中心で、デジタルコンテンツはあくまで付随的な存在と見てきた。しかし、ここ数年はデジタルコンテンツが急激に伸び、紙の本の売上も伸びている。KADOKAWAは1000人規模の会社で、ところざわサクラタウンは、最新のデジタル事業の拠点となる。同社が推進する各種デジタル事業の拠点となる。同社が目指す持続可能なコンテンツ・ビジネスの姿と、ところざわサクラタウンを中心としたSDGsの取り組みを紹介する。



同社が推進する各種デジタル事業の拠点となる。同社が目指す持続可能なコンテンツ・ビジネスの姿と、ところざわサクラタウンを中心としたSDGsの取り組みを紹介する。

出版デジタル革新による持続可能なコンテンツ・ビジネスの ところざわサクラタウン 発信される KADOKAWAのSDGs

実現へ から



出版業界、業界団体は出版の場、紙の本が中心で、デジタルコンテンツはあくまで付随的な存在と見てきた。しかし、ここ数年はデジタルコンテンツが急激に伸び、紙の本の売上も伸びている。KADOKAWAは1000人規模の会社で、ところざわサクラタウンは、最新のデジタル事業の拠点となる。同社が推進する各種デジタル事業の拠点となる。同社が目指す持続可能なコンテンツ・ビジネスの姿と、ところざわサクラタウンを中心としたSDGsの取り組みを紹介する。



同社が推進する各種デジタル事業の拠点となる。同社が目指す持続可能なコンテンツ・ビジネスの姿と、ところざわサクラタウンを中心としたSDGsの取り組みを紹介する。

出版デジタル革新による持続可能なコンテンツ・ビジネスの ところざわサクラタウン 発信される KADOKAWAのSDGs

実現へ から

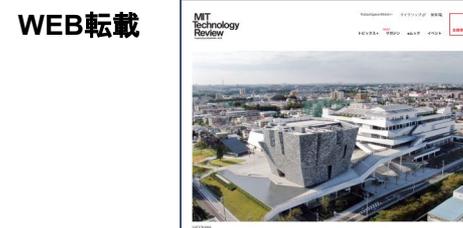


出版業界、業界団体は出版の場、紙の本が中心で、デジタルコンテンツはあくまで付随的な存在と見てきた。しかし、ここ数年はデジタルコンテンツが急激に伸び、紙の本の売上も伸びている。KADOKAWAは1000人規模の会社で、ところざわサクラタウンは、最新のデジタル事業の拠点となる。同社が推進する各種デジタル事業の拠点となる。同社が目指す持続可能なコンテンツ・ビジネスの姿と、ところざわサクラタウンを中心としたSDGsの取り組みを紹介する。



同社が推進する各種デジタル事業の拠点となる。同社が目指す持続可能なコンテンツ・ビジネスの姿と、ところざわサクラタウンを中心としたSDGsの取り組みを紹介する。

WEB転載



ところざわサクラタウンから発信されるKADOKAWAのSDGs

電子マガジン (PDF)



ところざわサクラタウンから発信されるKADOKAWAのSDGs

出版デジタル革新による持続可能なコンテンツ・ビジネスの ところざわサクラタウン 発信される KADOKAWAのSDGs



ところざわサクラタウンから発信されるKADOKAWAのSDGs

KADOKAWA 松原 社長インタビュー ところざわサクラタウンを拠点に 業界の「新スタンダード」を創っていく



ところざわサクラタウンを拠点に業界の「新スタンダード」を創っていく

MIT Technology Review Published by KADOKAWA / ASCII

SDGs

テクノロジーにできること



MITTRムック 広告メニュー

1. MITTR特別編集ブランド・ストーリー（本誌記事広告）	料金（G・税別）
<ul style="list-style-type: none"> ●ブランド×ワンテーマの舞台裏などブランドストーリー特集（4P記事広告） 仕様：中面 4C4P（制作費込） ●MITTR日本語サイト記事掲載（本誌記事WEB転載） NEW 仕様：Web転載（制作費込） 	3,200,000円
<ul style="list-style-type: none"> ●エグゼクティブ・インタビューほか（2P記事広告） 仕様：中面4C2P（制作費込） ●MITTR日本語サイト記事掲載（本誌記事WEB転載） NEW 仕様：Web転載（制作費込） 	1,600,000円
2. 広告スペース（本誌 純広告）	料金（G・税別）
表4 仕様：4C1P純広 天地×左右(ミリ) 247×200	1,000,000円
表2 仕様：4C1P純広 天地×左右(ミリ) 297×210	800,000円
表2対向 仕様：4C1P純広 天地×左右(ミリ) 297×210	800,000円
表3 仕様：4C1P純広 天地×左右(ミリ) 297×210	600,000円
表3対向 仕様：4C1P純広 天地×左右(ミリ) 297×210	600,000円

【スケジュール / ご留意点】

- ・広告掲載可否は事前にお問い合わせください。
- ・広告申込締切日はp2参照ください。
- ・表2・表3は見開きにすることも可能です。
- ・本誌(電子書籍版)には純広告は掲載されません。

広告申込み締切日

- ブランド・ストーリー(本誌記事広告)： **発売2カ月前** 申込締切
- 広告スペース(本誌 純広告) : **発売1カ月前** 申込締切

MIT Technology Review Japan
までお気軽にご連絡ください。

adsales@technologyreview.jp

角川アスキー総合研究所

KADOKAWA